

ここに人あり

芦北郡芦北町鶴木山。山の緑と、海の青とそしてはるかに天草の島々を望む芦北海岸の風光は、それこそ平和で美しい。だが、海沿いわずかな耕地しかない、この地の人々の生活は、

土への執念

「貞喜、しげの、畑。一畝、果樹園草とり。富男、牛舎裏の畑で燕麦刈り。」作業場入口の黒板に山石家のその日の作業予定が、記入してある。この作業予定表は、一日の作業を無駄なくすると同時に、訪ねる改良普及員や最近、特にふえた見学者のためのものでもある。
長男一敏君(二三)は、一・八畝の甘夏園担当。四十年年度農業コンクール新人王部門で受賞。三男富男君(一七)は、四十年年度経営伝習農場卒で、畜産担当。年間四〇頭の肉牛出荷を目標に、常時二〇頭を飼育。
山石さんの家を訪れた者は、まず黒板の前で、働く一家のはち切れそうなきぬきを感じとるのだ。

新しき農民像

★芦北郡芦北町
山石貞喜さん一家



上・海沿いの温泉街日奈久…幌馬車が今も抒情をそえて。



上・松江城のほとり…文化の殿堂…八代市厚生会館。

半農半漁の、決して豊かなものではなかった。このなかで、貞喜さんのような農業ひと筋に通じてきた人は少ない。報いは乏しくとも農業ほど確かな、そして働き甲斐のある仕事はないという執念のようなものがあつたのだ。
昭和三十八年、鶴木山に一七畝の甘夏園がスタートした。貞喜さんがまる一年かけて、尻ごみする周囲を説得し、私財全部を融資の担保に提供して実現させたもので、九州で、二カ所承認された開拓パイロット事業である。波紋はひろがって二年後には三〇畝にふえ、隣の計石地区にも構造改善事業で果樹園造成が始まった。貞喜さんは、このときすでに、生産コスト引下げ策も、スタートさせてい



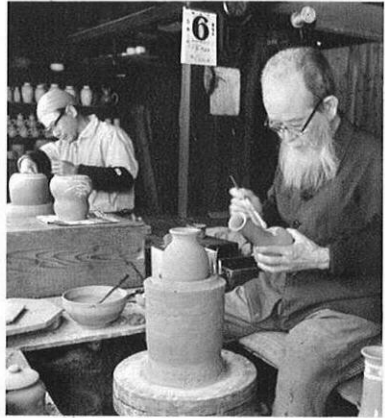
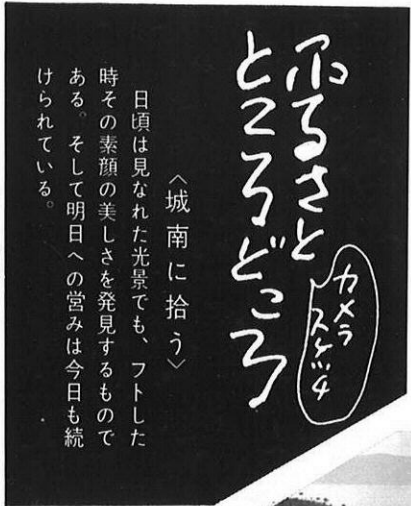
みかん栽培にもみんなの意見が……

肉牛の多頭飼育と甘夏の併営である。普及員の示唆で、敷藁の代りにオガ屑を使うことにした。水分の吸収がよく、取り扱い易く、製材所からも喜ばれ、経費もタダ同然、これは一石教鳥どころではなかった。畜舎肥は、そのまま片っ端から果樹園へ運ばれる。
貞喜さんが町の公民館報に、山石家の後継ぎ対策が成功した例を書いたため、町中は勿論、行く先々で質問攻めにあう。若者たちに向かって「祖先の、父親の仕事に尊敬すべきだ」という一方、父親たちに、「経営を開放し、息子名義の口座を作ってやる」ほどのふん切りを要求するので、若い連中は大喜びだ。
貞喜さんの、後継ぎ対策は、まず家を建てることであつた。二階に息子たちの個室二部屋、ピカピカの台所、きれいな風呂場、目をみはるようなしやれた家だ。「何といつても、わが家が一番いい、と子供に思わせなければと思った」のだ。棟上げの日取りは、子供たちが黙って、八月二十七日に決めてしまった。父親の誕生日であつた。貞喜さんはもう大丈夫だと思つた。
「いわしの頭で育つたじいさん。からいもと麦で大きくなった私。息子たちは、米とみかんでふとるわけですわい。」という貞喜さんの言葉から、そのまま、

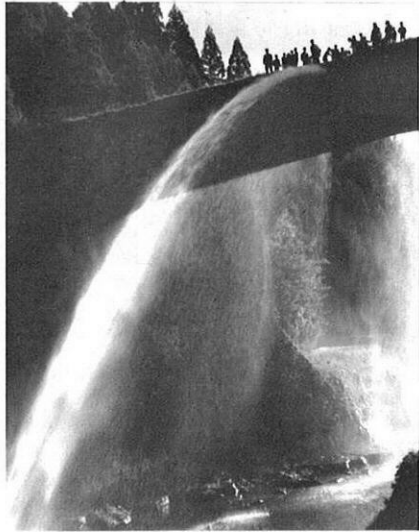
若いモンに夢を

この地の生活の変遷をうかがうことができるようだ。
// 仕事に倦んだ、生れた土地に倦んだ、女房に倦んだ。山石家の家憲をかたくなままでに守って、働きづめに働いた貞喜さんは、いま働くと同時に考える農民である。
山石さん一家の場合、どちらかといえば戦後の、それも新しい農業革新期を境に大きく伸びた農家である。普及指導に、実に卒直に反応した、いわば、農業普及行政が育てた新しいタイプの農家を見るような気がするのである。

働く一家の楽しい生産会議……



上・古い陶芸…八代の高田焼



上・矢部地方には溪谷の景勝地が多い(通潤橋にて)



上・見直されてきた芦北海岸……海の浦にて



上・益城地方には古き酒つくりの町が…(御船町にて)



上・海岸美を誇る水俣の温泉郷(湯の児)